

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	こども発達未来スタジオippo木原教室 児童発達支援事業		
○保護者評価実施期間	令和8年2月1日		～ 令和8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14名	(回答者数) 12名
○従業者評価実施期間	令和8年2月1日		～ 令和8年2月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年3月1日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	感覚特性に配慮した刺激の少ない環境設定と、自律的な活動を促す視覚的構造化の取り組み。	カームダウンエリアの設置、パーテーションやマットを使用した物理的構造化、「見るべきもの」「説明している人」に注目しやすいように掲示物を最小限に抑えている。	理解に合わせて視覚支援のレベル(写真からイラスト、文字へ)を段階的に移行する。 指示を待つのではなく、ワークを見て「自分で次の活動・課題を選ぶ」機会の創出。
2	個々の特性や当日のコンディションに合わせた『静・動』の活動バランスの最適化。集中が途切れない円滑な活動移行のための支援。	単なる運動でなく「重い荷物を運ぶ(固有受容覚への刺激)」「トランポリン(前庭覚)」など、感覚特性に合わせた課題を組み合わせ実施している。 活動が切り替わる際の不安を減らし、集中を途切れさせないように工夫(タイムタイマー・スケジュール)している。	同じ動作でも「ゆっくり高く」や「速く細かく」のような、目的・目標に合わせた運動のバリエーションをスタッフ間で共有・提案できるようにする。 スケジュール表を児童自身が確認し、次の活動のカードを確認し、行動に移す「自立移動」の習慣化。
3	発達の土台作りを重視した療育プログラム。	雑巾かけ、椅子の片付け等を通して、固有受容覚への入力を促し、ボディイメージを育み、集中力向上を図っている。 密なコミュニケーションが苦手な児童でも、同じ空間に他者がいることに慣れるための「並行遊び」練習から取り組んでいる。	「個別で練習 → 集団で実践」の運動を図る。個別課題で習得した課題の成果を、小集団活動でも発揮し、自己効力感を感じる機会を提供する。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	高度な環境設定への「依存」と汎用性の不足	事業所内が手厚く構造化されているため、構造化がない家庭や園等「一般的な環境」へ移行した際に、混乱が生じやすい。	成長段階に合わせ、構造化の度合いを意図的に減らす必要がある。段階的除去の計画案を作成し、家庭や園でも活用できる簡易ツールの共有を強化する。
2	視覚支援の固定化による「選択」「自己決定」の機会減少	提示されたスケジュールが習慣化し、児童が自ら「何をするか選ぶ」「意思を伝える」といった能動的な発信が弱くなる傾向がある。	「日課理解・活動理解のための視覚支援」から「自分の意思を伝えるための視覚支援」へ重点を移す。活動の一部に「自己選択枠」を設け、意思決定を促す環境を整える。
3	支援方法・業務内容の共有	担当スタッフによって「できること・できないこと」に差が出てしまい、利用者や保護者に不安を与えてしまうリスクがある。	「なぜその対応が上手くいったのか」を言語化して共有する。環境の構造化・業務のマニュアル化を図る。誰が見ても「次はこれをする」と分かる環境を作ることで、スタッフの指示内容がバラけるのを防ぐ。業務内容・支援内容の「枠組み・型」を職員間で共有する。